

10月19日（月）ヘブル人への手紙7章1、2節

「彼の名は訳すと、まず「義の王」、次に「サレムの王」、すなわち「平和の王」です。」（2節）

7章1節からの記事は、5章10節「メルキゼデクの例に倣い、神によって大祭司と呼ばれました。」6章20節「メルキゼデクの例に倣って、とこしえに大祭司となられたのです。」を受けて、まずはメルキゼデクについて語っています。

以前にも書いたとおり、創世記14章17～20節にメルキゼデクが出てまいりますが、彼に関する詳しい説明はありませんし、ヘブル人への手紙においても、「サレムの王」「いと高き神の大祭司（1節）」「義の王」「サレムの王」すなわち「平和の王」（2節）で、「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです」（3節）「族長であるアブラハムから一番良い戦利品の十分の一を与えられた」（4節）ということしか書かれていません。その中にあって重要なことは、アブラハムから十分の一を受け取り、約束を受けたアブラハムを祝福したこと（6節）であり、それはアブラハムが、メルキゼデクに一番良い戦利品の十分の一を受け取る権利があることを承認して、彼に与えたということになります。また、メルキゼデクという名がそもそも義の王という意味ですから、名はその人の本性や属性を表すことを考えれば、メルキゼデクは義の王として義を愛する人物であったでしょうし、「平和の王」と呼ばれたことについては、義は常に平和の根拠となることを考えると当然と思えます。パウロが「実に、キリストこそ私たちの平和です」（エペソ人への手紙2章14節）とありますように、イエス様もメルキゼデクのように義の王であり、平和の王です。そして15節で「この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し」17節「また、キリストは来て、遠くにいたあなたがたに平和を、また近くにいた人々にも平和を、福音として伝えられました。」とありますように、イエス様自らが平和を実現し、平和を福音として伝えられた平和の王です。イエス様によって成し遂げられた平和を私たちも受けていることに心から感謝しましょう。

10月20日（火）ヘブル人への手紙7章3節

「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。」

ここで私たちが驚かされることは、創世記14章17～20節の短い箇所において全く語られていないことについてもヘブル人への手紙の著者が語っていることです。例えば、「父もなく、

母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、終わりもなく」ということは、創世記14章17～20節には何の言及もありますが、ここでヘブル人への手紙の著者が言おうとしたのは、メルキゼデクが神的な存在だということではありません。むしろ、彼が大祭司という特別な存在であったということを強調しようとしたのでしょう。例えば、祭司の務めを行うにはレビの家系の出であることが必須ですが、メルキゼデクがそのような出自ではありませんでした。また生涯の初めもなく、いのちの終わりもないメルキゼデクは、いつまでも祭司としてとどまっていることが可能だということです。このことにより「神の子に似た者とされて」とありますが、神の子とはイエス・キリストを指すと考えれば、メルキゼデクの特徴は、まさに神の子イエス・キリストを表していると言えます。

そして、ヘブル人への手紙の著者が、このようにメルキゼデクについて語ってきたのは、5章10節や6章20節にありますように、イエス様がメルキゼデクの例に倣ってとこしの大祭司となられたからです。しかし、イエス様は、神の御子であり、もともとすべてのものを統べ治める王の王であられるお方でしたが、人となってこの地上に来られ、全人類の罪をその身に負い、十字架にかかって罪の完全な贖いを成し遂げられました。そのお方が、仲介者として神と人との間に立ってとりなす大祭司となられたのです。これが、メルキゼデクとの大きな違いです。確かに、イエス様はメルキゼデクの例に倣って大祭司と呼ばれるようになれましたが、イエス様はメルキゼデクよりもはるかにまさる大祭司であり、本来大祭司となる必要のないお方が、私たちに対する愛とあわれみによって大祭司職に就いてくださったことに心からの感謝をささげるべきです。

10月21日（水）ヘブル人への手紙7章4，5節

「さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。族長であるアブラハムでさえ、彼に一番良い戦利品の十分の一を与えました。」（4節）

1～3節で、ヘブル人への手紙の著者が、メルキゼデクについて述べてきたことの理由は、アブラハムと対比させるためであることが4節から分かります。

4節の冒頭で「さて、その人がどんなに偉大であったかを考えてみなさい。」とありますが、アブラハムの偉大さに対するメルキゼデクの優越性を強調しようとしています。誰しもアブラハムの偉大さを認めているはずです。イスラエルはアブラハムを通して形成されたのであり、まさにユダヤ人たちの父祖であり、信仰の父として尊敬されるべき者です。また、ギリシャ語本文を見ますと、語順において族長という言葉が一番最後に来ていて、族長であるアブラハム

の尊厳が強調されています。そして、アブラハムがメルキゼデクに一番良い戦利品の十分の一を与えたということは、アブラハム自身もメルキゼデクの偉大さを認めていたということになります。

5節では、メルキゼデクとレビの子らの中でも祭司職を受ける者たちが対比されています。まず祭司職を受ける者は必ずレビの子孫でなければなりませんでした、「父もなく、母もなく、系図もなく」と言われているメルキゼデクとは大きく異なります。祭司職にある者たちは、律法によって（民数記18章26～27節）民から十分の一を徴収するように命じられていました。イスラエルの民は、律法の命令として祭司たちに十分の一を与えなければならなかったのです。しかし、アブラハムは命じられたのではなく、強いられてでもなく、自ら進んでメルキゼデクに一番良い戦利品の十分の一を与えました。受けるものについてもレビの子らから出た祭司とメルキゼデクとは全く異なることが分かります。

メルキゼデクに倣って、イエス様は永遠の大祭司となりました。アブラハムが、メルキゼデクの優越性と受けるべき権利があることを認めて、一番良い戦利品の十分の一を与えたのであれば、私たちも永遠の大祭司であるイエス様が、どのようなお方か知っているのですから、一番良い物の十分の一をイエス様におささげしたいと思わされます。そして「それなら、私たちはイエスを通して、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実を、絶えず神にささげようではありませんか。」（ヘブル人への手紙13章15節）とありますように、とこしえの大祭司イエス様を通して、私たちは神ご自身に最も良いささげ物として、賛美のいけにえ、御名をたたえる唇の果実をおささげしたいと思わされます。

10月22日（木）ヘブル人への手紙7章6，7節

「言うまでもなく、より劣った者が、よりすぐれた者から祝福を受けるものです。」（7節）

6節の「レビの子らの系図につながっていない者」とはメルキゼデクを指していて、3節の「系図もなく」に対応としています。

メルキゼデクは、2節と4節で見ましたように、アブラハムから十分の一を受け取り、1節にもありますように、「約束を受けたアブラハムを祝福しました。」ここで言われている約束とは、6章14節を指していると思われますが、ここでメルキゼデクが約束を受けたアブラハムを祝福するとは、祝福をもってアブラハムが与えられた約束を確かなものとするとか、祝福を伝達したということだったと思われます。

7節で「言うまでもなく」とは、「すべての反論なく」という意味ですが、祝福とは、より劣

った者がよりすぐれた者から受けるものです。ですから、人を祝福するのは神であって、人が神を祝福するということはありません。そう考えれば、アブラハムを祝福したメルキゼデクがアブラハムにまさっているのは当然のことです。そして、神の御子でありメルキゼデクの例にならって、とこしえに大祭司となられたイエス様は、私たちよりはるかにまさる方で、その方が私たちを祝福してくださるのです。それは、イエス様が私たちを祝福すべき理由があるからではなく、私たちに対する愛と恵みのゆえに私たちを祝福してくださるのであり、被造物を祝福することを喜びとされる創造主なる神であるがゆえに、私たちをも祝福してくださるのです。私たちも多くの祝福を受けていることを心から感謝しましょう。そしてとこしえの大祭司となられたイエス様に、最善のものを献げつつ、仕えてまいりたいと思わされます。

10月23日（金）ヘブル人への手紙7章8～10節

「十分の一を受けているのは、一方では、死ぬべき人たちですが、他方では、生きていと証しされている人です。」（8節）

「十分の一を受けているのは」とは、5節にありますように、律法の命令に従って十分の一を他のイスラエルの民から徴収し、それを受け取る祭司たちのことです。そして、彼らはもちろん死ぬべき存在であり、せいぜい何年間か神に仕えることができただけです。「他方では、生きていと証しされている人です」というのは、「いのちの終わりもなく」（3節）生きているメルキゼデクのことで、このようなかたちにおいても対比されています。

10節で「メルキゼデクがアブラハムを出迎えたとき、レビはまだ父の腰の中にいた」というのは、レビがまだ生まれておらず、アブラハムの腰の中にいた存在だったということです。そうであれば、アブラハムがメルキゼデクに十分の一を納めた時に、アブラハムの腰の中にいたレビも父祖であるアブラハムと一緒に十分の一を納めたことになるという意味では、律法によって十分の一を受け取るように定められているレビでさえ、メルキゼデクに十分の一を納めたと言えるのです。

このようにして、メルキゼデクはいのちの終わりが無いという点で、そして本来十分の一を受け取る立場であるレビですら、十分の一を納めるべき存在であったということに関して、レビ系のすべての祭司にまさる存在なのです。そしてイエス様もメルキゼデクの例に倣って、とこしえの大祭司であり、すべての被造物がささげ物をもってほめたたえ、礼拝すべきお方なのです。

10月24日（土）ヘブル人への手紙7章11節

「民はレビ族の祭司職に基づいて律法を与えられました。もしその祭司職によって完全さに到達できたのなら、それ以上何の必要があって、アロンに倣ってではなく、メルキゼデクに倣ってと言われる、別の祭司が立てられたのでしょうか。」

11節のキーワードは完全さということです。レビ族の祭司職は不完全でした。その不完全さの一つが弱さです。それは5章3節では罪であり、自分の罪のためにささげ物を献げなければなりません。次が祭司職に就く者は死ぬべき者たちだということです。（7章8、23節）そしてレビの家系の中から祭司職に就く者として最も不完全であることは、人を罪から完全に救うことができないということです。祭司たち自身が罪からの贖いを必要としているのですから当然のことです。そして、その面においては律法も不完全です。ローマ人への手紙7章7節においてパウロは「律法によらなければ、私は罪を知ることはなかったでしょう。」と言います。つまり、律法を通して自分がいかに罪深い存在であるかを知らされるのですが、律法は罪から私たちを救うことができません。このように、祭司も律法も不完全なので、アロンに倣ってではなく、メルキゼデクに倣ってと言われる別の祭司が立てられる必要があったのです。そのお方がメルキゼデクの例に倣ってとこしえの大祭司となられたイエス様です。神の御子であるイエス様は、完全な大祭司であり、一度ご自身を十字架にお献げになったことで、人類の罪の完全な贖いを成し遂げられたのです。まさにイエス様だけが完全さに到達されたお方です。それとともにメルキゼデクの例に倣って、とこしえの大祭司となられたイエス様を遣わされたことにより恵みを与えてくださった父なる神様に私たちは心からの感謝をささげましょう。

10月25日（日）ヘブル人への手紙7章12～14節

「私たちの主がユダ族から出られたことは明らかですが、この部族について、モーセは祭司に関することを何も述べていないのです。」（14節）

12節で「祭司職が変われば、必ず律法も変わらなければなりません。」とされていますが、祭司職が変わるとは、11節にありますように、メルキゼデクに倣ってと言われる、別の祭司が立てられることを意味しています。律法にはアロンの家系から大祭司が出ることが規定されているので、それ以外の家系から大祭司を出すためには律法が変えられなければならないということです。もちろん律法は、簡単に変更できるわけではありませんが、アロンに倣ってではなく、メルキゼデクに倣ってと言われる、別の祭司が立てられるのは、神のみこころであり、神

の主権をもってなされることなので、律法を与えられた神のみこころに従って当然律法は変わらなければならないと言われているのです。

13節の「私たちがこれまで語ってきた方」とは、メルキゼデクの例に倣って、とこしえの大祭司となられたイエス様のことですが、「祭壇に仕える者が出たことのない、別の部族に属しておられます」とは14節では、それがユダ族であると説明されています。「この部族について、モーセは祭司に関することを何も述べていないのです。」とは、モーセの与えた律法によれば、ユダ族から祭司が出るという記述は一切ないということであり、律法に従えばイエスは大祭司にはなれないということになります。しかし、28節に「律法は、弱さを持つ人間たちを大祭司に立てますが、律法の後から来た誓いのみことばは、永遠に完全な者とされた御子を立てるのです」とありますように、イエスは誓いのみことばによって大祭司として立てられたのであって、先ほども書きましたように、イエスはモーセの律法によるのではなく、誓いのみことばにより、神の主権的な導きを通して大祭司となられたということです。そして、主は今も誓いのみことばにより、ご自身が主権をもって召した者をそれぞれの働きに就かせ、その者を通して主はご自分の働きを遂行なさいます。ですから、まずはみことばを通して主の召しを確認し、召しを確信したならば、どんな小さな働きであっても、その働きを主の助けをいただきつつ全うさせていただきたいと思わされます。